



2015年
10月10日
No. 145

## 2015年度 東京蜘蛛談話会例会

1. 日時 2015年12月6日(日) 10時より(開場9時30分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒120-0022 東京都墨田区江東橋 3-3-7  
JR 総武線 東京メトロ半蔵門線 錦糸町駅南口から徒歩3分
3. 連絡 当日は、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。  
加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター, OHP 等用意いたします。
5. 講演をご希望の方は、演題と使用希望機材(スライド, OHP, コンピュータ)を事務局初芝までお知らせください。

〒186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 有限会社エコシス 初芝伸吾  
mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp  
Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

- 錦糸町駅南口から徒歩3分です。



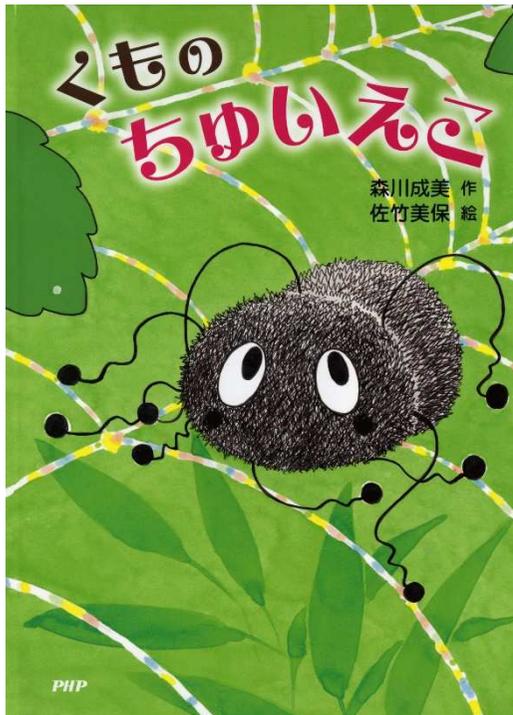
## 東京蜘蛛談話会 2015 年度採集観察会

1. 期 日： 第3回 2015年10月18日(日) 第4回 2016年2月21日(日)
2. 場 所： 神奈川県秦野市渋沢丘陵  
午前中は水田、水路周辺 午後は丘陵の林内
3. 集 合： 集合 10:00 小田急線渋沢駅改札口
4. 世話人： 水山栄子  
携帯電話：090-6143-6942

### クモが出てくる子どもの本情報 (13) 2013年に出版された読みもの2点と、 2015年に発行された雑誌1点の紹介

萩野 康則

今回は、2013年に出版された読みもの2点と、この7月に発行された雑誌1点を紹介させていただきます。



森川成美(作)・佐竹美保(絵)「くものちゅいえこ」

22×15cm/79pp. PHP 研究所 2013年2月発行 ISBN978-4-569-78296-6 本体1,100円

主人公のちゅいえこは、オディロン・ルドンの「蜘蛛」を頭と胴体の二部構成にして、かわいらしくしたような、小さなクモの女の子である。はやらない古道具屋の店先に置かれた、旧式の扇風機の中に住み、羽根の間に網を張りめぐらして暮らしていた。ところがある日、珍しく店に客がやって来て、扇風機は売れてしまう。仲良しだった扇風機はちゅいえこと一緒にいくか尋ねるが、彼女は店に残ることにした。ちゅいえこが次の住みかを選んだのは、大層立派だが鍵がないために動

かない、ゼンマイ式の置き時計の中。歯車の間に網を張りめぐらして暮らしていたが、ある日時計内部の隅に茶色の紙袋がはさまっているのを発見した。袋に入って中身を見ようとしたが、細い溝にはまって入ることができない。ちゅいえこにはこの袋はとても大事なもののようかと思え、何とかして店主のおじいさんにその存在を知らせたいと考えた。そこで彼女は、店の暖炉の中に住んでいるという、恐ろしい大グモにおびえながらも、夜中に袋と店内のレジ機との間を何度も往復して網のリボンを作る。翌朝、網のリボンに気づいた店主は、置き時計の中の紙袋を発見する。この後は想像通りの展開である。ただ、結末があまりにもあっさりしていて、私にはちょっと物足りなかった。もうひとひねりあっても良いのでは、と思う。

姿は出てこないが、文中に登場する父親はちゅたるけるという名である。動物を扱った物語の主人公は、ふつうその名前の由来が推測しやすいものだが、ちゅいえこことちゅたるけるは全く想像がつかない。「ちゅ」は共通するので、名字で「蛛」由来だろうか。そうすると「いえこ」と「たるける」が名前ということになる。ネットでいろいろと探して「いえこ」は角野栄子さんの「イエコさん」(ユリア・ヴォリ/絵、ブロンズ新社、2007年)から持ってきたのだろうか、「ちゅたるける」は往年のチェリスト、ヤーノシュ・シュタルケルをもじったものだろうか、などと詮索している。どうでもいいことではあるが、気になっている。

作の森川成美(もりかわ しげみ)さんは大学の法学部を卒業後、実務翻訳者になられた方。2007年ごろから児童文学作品を発表されはじめ、2009年には「アオダイショウの日々」(未刊)で第18回小川未明文学賞優秀賞を受賞されている。当初「閻魔の話」(石崎洋司・令丈ヒロ子/選「こわい! 闇玉」所収、講談社KK文庫、2007年)、「前世うらない」(日本児童文学者協会/編「プリンセスがいっぱい 5つのお話」所収、文溪堂、2010年)、「小僧の政吉」(新井リュウジ・藤咲あゆな/編「ちょーコワ! 最凶怪談話」所収、集英社みらい文庫、2012年)などの怪談・ホラー系の作品を多く書かれていたが、本作品と相前後して「アサギをよぶ声」(スカイエマ/絵、偕成社、2013年)、「フラフラデイズ」(つじむらあゆこ/絵、文研出版、2015年)など、より「健康的」な児童文学作品も発表されている。特に「アサギをよぶ声」は村の因習に抗して新しい道を進もうとする少女の希望と挫折を描いた素晴らしい作品で、クモには全く関係ないが一読をお奨めしたい。9月には続編が出版されるとのことである。

絵の佐竹美保(さたけ みほ)さんは、工芸高校でデザインを学んだあとにイラストレーターになられた方で、「ハウルの動く城」シリーズ(ダイアナ・ウィン・ジョーンズ/作、西村醇子/訳、徳間書店、1997~2013年)、「リンの谷のローワン」シリーズ(エミリー・ロッダ/作、さくまゆみこ/訳、あすなろ書房、2000~03年)、「魔法の宅急便」シリーズ[その3~6](角野栄子/作、福音館書店、2000~09年[文庫版は2006~13年])など、児童向けのSFやファンタジー作品の挿絵や表紙画を、実に数多く手がけておられる、この分野の日本の第一人者である。本文中の挿絵はモノクロの線画になるが、作品によってラフな表現から細密描写まで変幻自在で、人物も写実的なものありキャラクター化されたものありと、その物語を引き立てるためにさまざまなタッチを使い分けておられる。そして表紙は実に丁寧に描き込まれ、彩色されている。

購買者の中にはCDの「ジャケット買い」ならぬ本の「表紙買い」をする向きもあるし、そこまで行かなくても、表紙は売り上げに決定的な影響を与える。そのため出版社は、店頭でできるだけ多くの人が手にとってくれるような表紙画を描く能力のあるイラストレーターを探すことに腐心している。表紙画と挿絵の作者が異なることが多いのはこのためであろう。要求される作品の性質が異なるのである。しかし佐竹さんは表紙画も挿絵も、申し分のないものを描くことができる。出版社にとっては実に頼もしい存在だろう。

なおSF・ファンタジー系作品の外にも「絵本 千の風になって」（新井満/文、理論社、2004年）や「絵本で学ぶ イスラームの暮らし」（松原直美/文、あすなる書房、2015年）など、ノンフィクション作品の絵も手がけられていて、こちらでは全ページ、オールカラーで佐竹さんの絵が堪能できる。



仁科 幸子（作・絵） 「クモばんばとぎんのくつした」

21×16cm/71pp. 偕成社 2013年7月発行 ISBN978-4-03-528440-6 本体1,000円

コガネグモの老婆クモばんばと、ナメクジの少年ニュルの心温まる物語である。

ある春の夜に、ニュルはひな菊の花の上で月を眺めていた。しかし上を飛んでいった蛾に笑われなじられて、すごすごと花からおりて岩陰の穴で寝てしまう。ナメクジである彼はみんなに気持ち悪がられ、いつもひとりぼっちなのだ。ある朝、原っぱを散歩していると、クモばんばとぼったりと出会う。彼女は糸で織物を作って売っており、その糸を染めるためにツユクサの花を摘みに来たのだった。クモばんばはナメクジのニュルを疎む

こともなく、ニュルも彼女に心を開き、二人は意気投合する。そして彼はクモばんばの店を手伝い始める。店を訪れるクモに対応したり、密かにあこがれていたルリタテハにやさしい声をかけてもらったりと、今までひとりぼっちだったニュルは毎日が楽しくてしかたがない。しかしある日、コガネムシがクモばんばとニュルの悪口を言っているのを耳にしてしまう。「クモばんばも落ちぶれたもんだ。ナメクジを店番に使うなんて」と。ぼくが店にいるとクモばんばはますます嫌われてしまう、と考え、彼は店を去る決心をする。ところが、ニュルの不注意が元になって、糸を銀色に染める画期的な方法が見つかったのだ。この技法により、ハナグモの結婚式

用に頼まれていたベールはとても美しく仕上がった。「クモばんばの銀色の織物は幸せを呼ぶ」と大評判になり、これまで彼女を馬鹿にしていた虫たちまでがこぞって身につけるようになる。

嫌われ者同士の友情によってひきこもりから社会参加を始めたニュルが、何の取り柄もないと思いでいた自分にも、世の中の役に立つことができる、そう気づき、堂々と生きていこうと決意する姿はすがすがしい。安心して子どもたちに読ませられる、まっとうな児童書である。

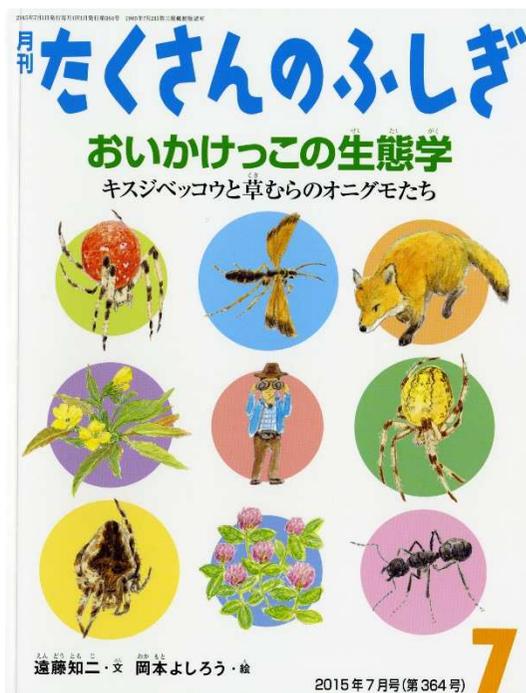
本のタイトルではクモばんばが主役のようにになっているが、実際はニュルがメインでクモばんばは脇役に近い。本文中には「つのをだしたりひっこめたり」と書かれているが、絵のニュルは触角をいっさい出しておらず、ナメクジには見えない（後述の「ハリネズミとちいさなおとなりさん」シリーズ第1作の「なんにもしないいちにち」にはニュルの原型とも言えるナメクジが描かれているが、こちらは触角がある）。でもバクカクマムシのようでとてもかわいらしい。気弱でやさしい、彼の性格がよく表現されている。

作者の仁科幸子（にしな さちこ）さんは美術大学を卒業後、グラフィックデザイナーとして作品を発表され、メキシコ国際ポスタービエンナーレ展、スイスグラフィックポスター展、ADC賞などに入選されている。1995年ごろより児童書に取り組まれるようになる。文と絵の両方を手がけた作品に「Moon 森のたからもの」（ブロンズ新社、1997年）、「ハリネズミとちいさなおとなりさん」シリーズ（フレーベル館、2004～05年）、第23回ひろすけ童話賞受賞の「ちいさなともだち 星ねこさんのおはなし」（のら書店、2011年）などがある。また、挿絵を担当した作品に「グリーンマジックサーカス」（三谷一郎/文、ワニブックス、1995年）、「フェアリー・レルム」シリーズ（エミリー・ロッダ/作、岡田好恵/訳、童心社、2005～07年）などがある。

銅版画を思わせる、鋭いタッチの密度の濃い線画が基本的な画風で、黒インクの線画に水彩で色を載せたものが多いが、本作のように線画自体にカラーインクを使った作品もある。また、線画は輪郭線など最小限にとどめ、パステルや色鉛筆の乾燥系画材と水彩で彩色した、優しいタッチの画風の作品もある。多くの作品で森と月が取り上げられており、仁科作品の重要なモチーフとなっている。

遠藤 知二（文）・岡本 よしろう（絵）「おいかっこの生態学 キスジベッコウと草むらのオニグモたち」 たくさんのふしぎ  
2015年7月号

25×19cm/40pp. 福音館書店 雑誌コード



## 15923 税込 720 円

前号で予告した「まちぼうけの生態学 アカオニグモと草むらの虫たち」（2011年8月号・本紙133号で紹介済み）の続編で、前作同様、遠藤知二（えんどう ともし）＋岡本よしろう（おかもと よしろう）のコンビによるものである。前作はアカオニグモと網にかかる昆虫を中心にした話だったが、今度はベッコウバチの一種であるキスジベッコウと彼女たちが狩るクモとの攻防についての話である。

舞台は前作と同じ札幌市郊外簾舞の河原である。前年、アカオニグモの「まちぼうけ」を観察していた遠藤さんは、キスジベッコウがアカオニグモに襲いかかるのを何度か見たが、狩りが成功する場面は一度も見なかった。キスジベッコウにとってアカオニグモは相当強い相手で、そう簡単には狩りは成功しないようであった。そこでキスジベッコウがどのように狩りをするのか、詳しく調べることにしたのだ。

調べるためには、キスジベッコウの個体識別をする必要がある。そこでまず行ったのは個体群生態学の定石であるマーキングである。捕虫網で採ったキスジベッコウの翅にペイントマーカーで印をつけて放す。河原にいたアカオニグモにも印をつける。これでどのハチがどのクモを狩ったのかが確認できる。ホアンホアンと名付けたキスジベッコウが早速夕方、印のついたアカオニグモを狩って、営巣地の河原の砂地に引きずってきた。すぐには営巣を始めず、日没ごろになって砂地に穴を掘り始める。穴を掘ってクモを運び入れ、産卵して穴を埋め戻す。作業が終わったのはすっかり日の暮れた夜8時ごろだった。このような観察を一夏続け、遠藤さんは8個体のキスジベッコウがクモを狩ってくるのを確認した。どのハチも、ほとんど毎日夕方、決まった場所にクモを運んできて、日暮れごろになって営巣を始めるのだった。獲物のクモはアカオニグモ、キバナオニグモ、ヤエンオニグモなどで、ハチ1個体が狩ったクモの数は一番多い個体で11個体、一番少ない個体は1個体、平均約4個体だった。また、複数種のクモを狩ってくる個体もいる一方で、単一種のクモばかりを狩る個体が目立った。

この「狩るクモの好み」は単なる偶然なのか、それとも遺伝的に決まっているものなのだろうか。また、ハチがクモを実際にどのように狩るのかもまだ確認できていない。これらの疑問を解決するため、2年目の夏は営巣地でハチを待つのではなく、河原の観察地全体でハチを追いかけることにした。300×400mほどの観察地の詳細な地図を作成し、その範囲内で網を張っているクモに片っ端からマーキングし、その場所を地図上にプロットする。観察地中央に脚立を置き、その上で双眼鏡を使って観察地を見渡し、キスジベッコウを見つけたら徹底的に追いかけ、行動を記録する。この際、野帳に書いていたのでは間に合わないので、テープレコーダーに録音する。また、昨年作られてまださなぎが羽化していない巣穴の上に網をかぶせておき、羽化してくるハチを捕らえてマーキングする。

もちろん全てが順調にいくわけがない。せっかく狩ったクモがアリに横取りされたり、いたずら子ギツネに営巣地をめっちゃめっちゃにされたり、羽化したハチが網の中で死んでしまったりと、トラブルの連続だった。それでも、たくさんの興味深い知見が得られた。

クモを狩る方法は、相手となるクモの種によって微妙に違うことが分かった。アカオニグモとキバナオニグモは、ハチが近づいてくると逃げずに脚をひろげて迎撃態勢をとる。このためほとんどの場合、ハチは攻撃をあきらめて飛び去ってしまう。狩りに成功するのは、ハチのクモへの体当たりが功を奏して、クモが落下した場合である。地表に落ちたクモにはもはやなすべが無く、ハチに刺されて麻痺してしまうのだ。ヤエンオニグモの場合は、クモ自体を見つけるのは難しいのだが、ひとたび見つけてしまえば（アカオニグモとキバナオニグモのように迎え撃つことはない）うまく攻撃することができる。网上的クモを針で刺し、弱って地上に落ちたところでとどめを刺すのだ。また、「狩るクモの好み」についてはアカオニグモばかりを狩っていた母バチの娘2個体がいずれも複数種を狩り、複数種を狩った母バチの娘2個体がいずれもアカオニグモばかりを狩ったことから、遺伝的に決まっているものではないことが分かった。

私は大学時代、理学部生物学科の系統研究室という部屋に所属していた。しかし実際の研究分野は「動物の分類または生態」であり、分類よりも生態をやっている学生の方が多かった。同じ部屋の学生たちの中には、モンシロチョウの翅にペイントで印をつけたり、カナヘビの指を切ってマーキングをしている者がいた。また、飼育ケージを覗きながらテープレコーダーに向かって何かぶつぶつつぶやいている、アリの社会性を研究している学生もいた。今回の遠藤さんの記述は、私の学生時代の記憶とオーバーラップして、とても懐かしい、甘酸っぱい感慨をもたらした。

ところでこのキスジベッコウというハチは、開発等の影響で生息できる場所が激減し、各地で「幻のハチ」となっているそうだ。都道府県のレッドデータブックでは宮城県で「準絶滅危惧種」となっているし、東京都、神奈川県では「絶滅」とされている。この簾舞の河原でも、前作執筆のため5年前に訪れたときには、すでに確認できなかったそうである。このハチたちの子孫がどこかで生き延びているように、との願いを込めて、作品は終わっている。

遠藤さんは、前作の付録「ふしぎ新聞」に「まちぶせ型のアカオニグモにはこちらもまちぶせ型でしたが、飛びまわるキスジベッコウを見るためには走って追いかけました。その話はまたいずれ」と書かれている。この手の「またいずれ」はいわば常套句、社交辞令のたぐいで、実際には書かずに終わることの方がはるかに多いのではなからうか(そう書いている自分の耳が痛い)。それをきっちりと実行された遠藤さんに敬意を表したい。実はキスジベッコウも研究対象とされていた実兄の遠藤彰さんは前作出版後の2011年11月に亡くなっている。この作品にはお兄さんへのオマージュの意味も込められているのだと思う。

遠藤知二さん、岡本よしろうさんお二方の経歴や著作については、すでに本紙133号で紹介したので、ここではそれ以降の著作についてのみ記すことにする。遠藤さんは「糸の博物誌 ムシたちが糸で織りなす多様な世界」(齋藤裕・佐原健/編、海游社、2012年)に「クモと糸」という、出糸腺と糸と網に関する大変分かりやすい総説を書かれている。岡本さんは、「生きる」(谷川俊太郎/詩、月刊「たくさんのふしぎ」2013年9月号、福音館書店)の絵を描かれ、また初めての自作絵本「きょじんとみち」(フジテレビ KIDS・ブックオフコーポレーション、2013年)を

出されている。後者は五味太郎的なナンセンス絵本ともいえるが、示唆深く、味わいのある良書である。一般書店では販売してないが、ブックオフオンライン<<http://www.bookoffonline.co.jp/new/0017153005>>から新刊書として購入することができる(2015年8月23日現在)。

本作の「ふしぎ新聞」にはキオビベッコウをという別の種類のハチが、海辺で別のドラマを見せている旨が記されていて、「その話はまたいずれ」と締められている。キオビベッコウの主な狩猟対象はナガコガネグモらしい。「またいずれ」を真に受けて、新たなクモとハチのドラマを待つこととしたい。

なお、2015年8月19日発行の福音館書店のメールマガジン「あのねメール通信」によると、前作「まちぼうけの生態学 アカオニグモと草むらの虫たち」は「たくさんのふしぎ傑作集」として、9月5日に刊行されるとのことである(ISBN978-4-8340-8185-5, 本体1300円)。本紙発行時にはもう発売されているはずである。雑誌で買い逃した方、これを機会にぜひ。

### 京都だより (3) 洛西山崎あたり

新海 明

2007年12月。この頃に谷川さんと調べ始めたキシノウエトタテグモの分布を「関西でもやろう」ということになった。毎年12月下旬に開かれる関西クモ研究会の総会の日程に合わせて、京都から大阪にかけて調査をすることになった。この調査でわかったことは京都を外れるとパタリとキシノウエが消失するという事だった。その京都の西のはずれの分布地が山崎だったのだ。サントリーの山崎ワイナリーがあるところ。あるいは天王山の地・・・とでも言えば「ああ、あそこか」と思い出される方もいるだろう。実は、ここにキシノウエが豊産することは、それ以前から知っていた。

私は、かつて仏塔を訪ね歩いたことがあった。おそらく国宝級の仏塔(現在24箇所存在する)ほぼすべてを見たと思う。京都や奈良の有名なものはもとより、東は山形羽黒山の杉木立の山中に佇む五重塔から、西は山口県の瑠璃光寺。果ては、瀬戸内に浮かぶ小島の丘にある向上寺や兵庫県加西市の山奥の一乗寺の三重塔など、さほど衆人に知られていない塔まで訪ねまわった。そして、「ついでにクモも調べた」のだった。京都洛西の山崎には宝積寺の三重塔があった。

JR関西本線の山崎で下車し、傾斜地に沿って上った。周辺は宅地化されていたが、そのところどころに崖地がむき出しになっていた。当然、視線はそこに釘付けになった。あちこちに、あの丸い戸蓋が見えた。「やはり京都には、どこでもキシノウエがたくさんいるのだな」と、その当時は思ったものだ。丘陵上にたたずむ宝積寺の塔は、重要文化財だというのに、コンクリートで囲まれた駐車スペースの後ろ側にあり、そのたたずまいには失望した。がっかりしながらの帰り

道に「大山崎山荘美術館」という看板が目にとまった。何気なく、その方向に歩みを進め寄り道をしてきたのだ。こんなときに、「穴場に」出会うものだ。私が感激したのは、そこに置かれた展示品ではなかった。

館内をひと通り見終えた頃、ベランダ越しに緑の森が目に入った。そこに出ると、森の彼方に淀川と平野の広がりが見えたのだ。山崎の合戦のあたりだろうか。かつて彼の地で繰り返された戦の歴史に思いを馳せたのは一瞬で、私には緑の木立を吹き抜けてきた風の心地よさの方が印象に残ったのだ。しばし時の立つのを忘れ、洛西を吹き抜ける緑の風に身を任せた。こんななんでもない場所との出会いが、得も言われぬ感動をもたらせる。

宝積寺のキシノウエトタテグモ調査で印象的だったのは、崖地だけでなく山肌の落ち葉の下にも、多くの住居が見られたことだ。神戸女学院大学の構内のキシノウエも同じような環境で多数見られると聞いたことがあった。崖地は単に私たちが見やすいから発見例が多いだけで、実は山林内の地面に直接住居を穿つものもたくさん存在する可能性もある。発見例の少なさは、落ち葉を掻き分けてキシノウエを探す研究者がいないだけかもしれない。

同様の感想を、九州でのキムラグモ調査の際にも感じたことがあった。南九州の茶畑の山すその崖地に数多くのキムラの住居が見られた。中にはコケで戸蓋が覆われているものもいた。その崖の上には森が広がっていたが、ここにキムラが全く生息していないとは考えられなかったのだ。思い切って、そこで調査をすれば良かったのだろうが、林床の落ち葉や下草を掻き分けての調査をするのは躊躇われたのだ。いつの日か、時間があれば林床の地面に生息するキムラやトタテの調査をしてみたいものである

KISHIDAIA 原稿投稿先：池田博明 〒258-0018 足柄上郡大井町金手 1099

E-mail : fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp

あるいは

谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

ファイルサイズが大きい場合には、Yahoo ボックスに ID:kishidaia, PW:spider でログインしていただき、そのままルートにファイルをアップロードして、その旨を谷川までメールでご連絡いただいてもかまいません。

キシダイアの原稿締め切りは、6 月末日と 12 月末日です。

談話会通信投稿先：谷川明男 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416

E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

通信の原稿切は 4 月末日、8 月末日、12 月末日です。

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 3800 円、学生 2000 円です。

郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会費のことは：会計担当 須黒達巳

〒240-0026 横浜市保土ヶ谷区権太坂 1-39-6

TEL : 080-5683-2765 E-mail: t.s.schlegelii@gmail.com

# オニグモの糸の強度と体重 「飛行石のなぞ」撮影記録

池田博明

## 取材の依頼

2015年8月21日、TBSテレビ制作部(株)YELLOWのマネージャー・松山容子さんという方からメールが入っていた。「飛行石の正体はクモの糸の仕業だというなぞ解き番組を企画しているので、クモの解説および実験を指導してほしい」というものだった。飛行石(Flying Stone)とはFacebookにアップされた映像で、小石が宙に浮いて動くもの。番組はTBSテレビ月曜「世にも不思議なランキング なんで?なんで?なんで?」というものだった。放送予定日時は8月31日(月)だという。かなりきつい日程である。

ちょうど日本蜘蛛学会第47回大会に参加中だったので、私がこのメールを見たのは自宅に帰った23日(日)だった。

映像はYouTubeにもアップされており、YouTube上には数種類の「flying stone」映像があった。同じ投稿者Movie Funnyの8本の浮く石別動画もあった。宙に浮いているのは小石だけではない。外国からの投稿もあった。コメントをみると、すでにフジテレビの「奇跡体験!アンビリバボー」でクモの糸が原因と説明されているという。また、中城幸次氏の「Lovely flying Stone」(2011年8月29日アップロード)は同様の宙に浮かぶ石だが、「2日前から大きなクモが巣を作っていた」とコメントを記し、クモの糸だと字幕で断言している。

## 予備調査

小石の大きさはせいぜい1.5~2.5cmほどで、糸は写っていない。クモの糸なら糸を撮影者は目撃しているはずだが、そのことはコメントされていない動画が多い。超常現象であるかのような報告ぶりである。ちなみに、私は超常現象を信用していない。

それはさておき、8月23日の夜11時に足柄上郡中井町の巖島湿性公園へ出向き、クモの糸が支える重さを確認する実験が可能かをテストしてみた。その結果、オニグモ♀成体の網が複数あること、余分な糸を蚊取り線香の火で焼ききって1本だけにすることが可能なこと(新海明氏の方法)、タテ糸またはワク糸に安全ピンをかけていくと糸への荷重がどんどん増やせることが分かった。安全ピンはいろいろな大きさのものが市販されているが、市販のmitsuyaのAP-3P(全長38mm)1本の重さは0.65gだった。ゼムクリップを糸にかけていくという方法を宮下直氏が円網の糸の強度測定に使っていたことがある。

ただし、野外でオニグモの網を使うのであれば、夜間に実験を行う必要がある。深夜にはこれらの実験方法について松山さんに返信した。

### 虫かご内でクモに網を張らせる

8月24日、折り返し返信があり、クモの糸の解説をして欲しいこと、実験は25日（火）か26日（水）の夜にしたいことが伝えられた。25日は実家へ帰省する予定だったが帰省を延期した。実験の展開方法を申し送った。

小石の重さは意外に軽いものだ。直径1.5×1.0×0.4cm程度で0.85gもない（石の質にも依る）。そんな小石なら糸で軽々と持ち上げられるだろう。小石が糸で浮いていて近くにアシナガグモがいたという観察例を記憶している。1本の糸ではないだろうが、ヤモリを釣り上げたオオヒメグモの例がある（中島, 1991）。YouTubeには「クモの巣にかかった子スズメ」の動画（2009年7月28日アップロード）があった。オニグモの巣だという。飛行石の目撃者は石の大きさを直径3cmくらいと証言しており、テレビ局のスタッフが拾った3cmの石の重さを測定したら30gあったという。動画で見る限りそんなに大きい石ではない。

クモが地表面に糸を固着することを示すことも必要だろう。ヤモリを釣り上げた記録のあるオオヒメグモと昼行性の円網種ナガコガネグモを選び、虫かご（百円ショップで購入。16×9×10.5cm）に投入してみることにした。虫かごの底には切った厚紙をしき、カゴの四隅には足場用の割り箸を付けた。

オオヒメグモは足柄下郡真鶴町のトイレで、ナガコガネグモは中井町の井ノ口公民館付近の草原で25日に採集し、夕方に容器に投入したところ26日朝には造網していた。なお、割り箸を設置しない容器では造網しなかった。夜間撮影を26日（水）夜に延期するという申し出があった。

### オニグモの造網時刻

25日（火）15:00と21:00、26日（水）19:30にオニグモの造網場所を確認した。25日に確認した5頭のうち昼にも網を残していたのは2頭、また、橋の下のクモは川からの網の位置が高く、手が届きそうになかったし、川面に下りるには鉄柵を乗り越える必要があった。また、19:30にはワク糸にいたクモが25日の21:00、26日の22:00には完全な網を張っていたことから、造網時刻は19:30から22:00の間である。昼に残っている網は虫がかかった痕で穴だらけであった。ワク糸部分にアシナガグモが侵入していた。このアシナガグモは夜間には同じ箇所でも水平円網を張っていた。

### 台本を作製

当日の台本を確認する時間がなかったため、スケッチブックにディスプレイ用のフリップを作った。結局、このフリップは監督に展開案を説明するときに使っただけであった。台本はすでに用意されていてその内容を言うだけだったからである。

(1)飛行石は糸で吊られていると考えられる。その理由は浮遊する石の上でカットする映像がない（糸がないなら石の上をカットできる）、夜の映像がない（夜に照明を当てて撮影すると糸が写ってしまう）、石の動きが横方向のみである（糸の長さが変わらない）

(2)飛行石の糸が人工の糸か天然の糸かはわからない。手品師の使う見えにくい糸の可能性があり。天然の糸の場合、クモの糸であると断定可能な条件は何かを考察していく。

(3)テーマ1「クモの糸はどのくらいの重さまで耐えることができるか」。ジョロウグモの牽引糸（しおり糸）での実験データからは、弾性限界強度（伸びが元に戻る荷重）は体重の約2倍、破断強度（糸が切れてしまう荷重）は体重の約5倍だという。弾性限界強度が体重の2倍である理由は2本の糸が合わさっている牽引糸の1本が切れても自重を支えるためであると考察されている（大崎 2000）。

(4)円網をつくる主な糸 [本稿では模式図は略した]

ワク糸・タテ糸はびん状腺の糸，ヨコ糸は鞭状腺の糸，粘球は集合腺の糸。

(5)糸の途中に重りを下げた場合，糸にかかる張力の計算（力の分解）

直角三角形の辺の比，または三角関数で求めることができる。

[この説明の後で糸に重りをかけていく実験を行う]

(6)テーマ2「クモは糸を地表に固着するか」

容器内に網を作らせる（円網のナガコガネグモ，不規則網のオオヒメグモ）

(7)オオヒメグモの不規則網の特性 [本稿では模式図は略した]

支持糸はびん状腺の糸で，ガムフットの軸糸は弾性が大きい鞭状腺糸ではなく，大びん状腺糸または大小びん状腺糸の組み合わせである。ヒメグモ類には投げつけ粘球があるが，こちらの投げつけ粘球の軸糸は鞭状腺，大きな粘球は葉状腺（集合腺から進化した腺）と考察されている（Townley & Tillinghast 2013；東京クモゼミ報告第223号に紹介）。

(8)クモの糸いぼと吐糸管 [本稿では模式図は略した（遠藤 2012，池田 2015 を参照）。]

クモの糸いぼ上にはたくさんの吐糸管が並ぶ。ただし，タテ糸やしおり糸を出す大びん状腺の吐糸管は左右の前いぼに1個ずつである。したがって1本に見える糸は実は2本が合わさって出来ている。

## 解説の撮影

8月26日（水）に巖島湿性公園付近の井ノ口公民館研修室で，スタッフ（監督・カメラマン・録音係・マネージャーの四人）との打ち合わせと解説の撮影を行った。

20:10に集合の予定だったが高速道路の混雑からか実際にスタッフが到着したのは21:00。公民館は22:00に完全閉館なので時間に余裕がなくなった。池田の台本を手短かに説明したが，監督はフジテレビの番組「アンビリバボー」ではクモの糸の仕業と断言していることもあり，「クモの糸の可能性はある」では構成できない，単純にクモの糸だと断定して展開して欲しいとのこと，最終的には「クモの糸だと思います」と「思います」を付けることで納得した。台詞はほとんど台本の言葉を言うだけだったが，棒読みにならない様に話すのは難しく，何度もテイクしなおすことになった。

「アンビリバボー」（2015年1月15日放送）では新宅広二氏が「クモの糸です」と断定し

ていたが、私にはなぜ撮影者がタネを明かさないので不審であった。撮影者は一般の主婦で子供と一緒に観察した映像で周辺の糸をチェックするまで注意を向けなかったと証言している、監督の説明があったが、それは証言者の作為だと思う。知っていてもタネをあかさないのは手品師やマジシャンの通例である。

### 重りをかける実験の撮影

厳島湿性公園に移動すると、19:30にワク糸上のクモを確認しておいた地点にオニグモ♀が大きな網を張っていた。ワク糸も太く長く、橋の欄干から上方の網に向かっていて、網も一箇所ヨコ糸が壊れているだけできれいだった。撮影開始が22:00と遅れたことが幸いしたようである。

安全ピンで徐々に荷重していくというのんびりした展開では放送時間がないということで、ワク糸に直接石を吊るしてみることにした。石にもめん糸をガムテープで貼り付け、めん糸の先を安全ピンに留める。その安全ピンにクモの糸をはさむ。石に糸をつけて重りを作るのは松山さんの仕事、はじめに16gの重りを吊るしてもワク糸は切れなかった。重りを除くと糸は元の長さに戻った。弾性限界強度以下ということである。重りを重くしても切れなかった。遊び心で監督がフィギュアを一つずつかけてみる。七体のフィギュアをかけても切れない。七体のフィギュアの重さは27gだった。

30gの重りをかけたところ、糸が切れた。別のワク糸に試してみたが、こちらも切れた。鉛直方向の重さを2本の糸で支えているから1本あたりは15g重ということになる。

ジョロウグモの牽引糸(しおり糸)では、破断強度は体重の5~6倍というデータがあるので、オニグモの体重を測定してみる提案をした。捕獲してジップロックに入れ、おとなしくなったクモを袋ごと測定してみると6~7gという表示である。しかし、この重さには袋の重さが加わっている。袋だけの重さを測定すると4gであった。するとクモの体重は2~3gということである。秤のミスかと思い、別のデジタル秤で測定したが結果は同じだった。体重を約3gとするとその5倍は15gである。

実験の際に27gのフィギュアで斜めになった糸が鉛直方向と作る角度を仮に30度とすると(撮影したが放送されなかったので角度は未確認)、1本の糸にかかる張力は鉛直方向の荷重の0.577倍になる。27gの0.577倍は15.58gである。オニグモのワク糸はジョロウグモの牽引糸から得られた理論的な破断強度、体重の5倍に近いという結果になった。

ほかにもオニグモ♀の網はあったが、ワク糸が細い・メスの体重が小さい・造網場所に近づけないなど難点があって撮影は23:40ごろ終了し、撤収・解散した。

### クモの体重を測定

大崎茂芳氏は『クモの糸のミステリー』(2000)では、ジョロウグモの牽引糸の破断強度をクモの体重の5~6倍としているが、『クモの糸の秘密』(2008)では、範囲を広げて5~10倍と記している。糸を引き出す条件により強度が変化することを考慮したものと思われる。

番組スタッフから訊かれたもっとも重要な質問は「どの程度の重さまでクモの糸は耐えられるのですか」ということだった。ところが、この質問には単純に答えることができない。クモの成長段階や体重によっても異なるし、ワク糸などは往復回数によって太くなっている可能性がある。実験してもひとつに解が決まるものでもなさそうである。とはいえ、科学的な答えは大崎氏の体重相関仮説である。

それでは、オニグモの体重は何gだろうか。8月29日（金）夜に巖島湿性公園で3頭のオニグモのメス成体の体重を測定した。オニグモはジップロックに入れるとすぐにおとなしくなる。デジタル秤（AND社のHT-120）に袋ごと載せ、測定後に袋の重量（2.30g）を差し引く。

欄干に造網していた体長19.0mm 個体Aの体重1.16g、同じく欄干に造網していた体長22.0mm 個体Bの体重1.06g、橋下に造網していた体長25.0mm 個体Cの体重2.56g、橋下に造網していた体長26.0mm 個体Dの体重2.88g、橋下に造網していた体長28.3mm 個体Eの体重4.06gだった。体重4gのクモが作るしおり糸1本なら10倍として40gの石まで持ち上げることができる計算になる。この夜は造網地点の足場が悪いため重り実験を行わなかったが、クモを持ち帰って室内で造網させるという方法に気づき、翌30日（土）に個体AとDを連れ帰り、自宅の使用していないトイレに閉じ込めた（22:30）。はたして造網してくれるだろうか。

同日に大井町で採集されたイエオニグモを測定してみると体長10.0mm♀成体の体重0.35g、体長6.0mm 幼体の体重0.05gだった。

松山さんから「クモの糸はタンパク質にもかかわらず、なぜじょうぶなのか、一般の方にわかりやすい説明は？」と問われた。高分子物質の物性の質問である。カイコの絹糸もタンパク質だが、じょうぶさという点ではクモの糸に長がある。それは分子がきちんと一定の方向にならんでいるからだろう。一方、クモの糸のじょうぶさという点で大事な点は弾性に優れていること、つまり引っ張って伸びても手を離すとともに戻るゴムのような性質である。分子内にゴムに似た構造があるのだろう。優れた弾性は飛行する虫の運動エネルギーを吸収して弱めるために発達したもので、虫を取るために糸を使う生物はクモだけである。アメリカ軍はクモ糸製の防弾チョッキを開発したが防弾チョッキに必要な特性とは堅さだけではなく、銃弾の運動エネルギーを吸収して弱めることだった。大量生産技術がないためクモ糸産業は普及していない、といった説明をした。

### 番組が放送された

8月31日（月）20:00からの新聞での番組題名は「タカトシの不思議な？ランキング！なんで？」、正式名は『世にも不思議なランキング なんで？なんで？なんで？』。飛行石は最初のランキング6位の現象として放送された。飛行石の撮影者は主婦Kさん、撮影場所は長崎県諫早市だそうである。

実験で20gの石をクモのワク糸が支えたという映像が出てくるが、2本の糸が作る角度（約86度）からして1本の糸にかかる張力は20g重以下（計算では14.6g重）である。ただし、ワ

ク糸はクモが往復して強化している可能性があるので、このワク糸でないほかのワク糸がどれほど強いかは断言できない。

解説部分で私は「クモの糸は同じ直径なら鋼鉄より4倍も強いです」と言うが、これは、撮影台本にあったセリフそのまま。遠藤(2012)は「クモの糸がいかに優れているかを示すために、しばしば鋼鉄よりも<5倍強い>などと言われます。また、クモの糸は<強くて柔らかい>という2つの性質を併せもつことが特徴だとも言われます。これらの言葉が正確にどういう意味なのかを理解するのは、日常的な表現であるにもかかわらず、それほど簡単ではありません(Box1-1糸の力学的性質を参照)」と書いている。4倍とか5倍という値は内実が不明瞭だがクモ糸の強度として百科事典によく出ている数値である。ちなみに、Foelixの『Biology of Spider』に引用されたVollarth(1993)のデータではSpider Silk(クモ糸)のtensile strength(引っ張り強度)はSteelの2倍。

### 部屋で造網を試みる

一方、自宅の小部屋に放したオニグモは造網しただろうか。個体Dは8月30日・31日ともに昼も夜も造網しなかった。小部屋の柱の最上部に静止しているだけであった。日によって静止位置を変えている。小形の個体Aは行方不明になった。

大崎はオオジョロウグモを室内で造網させようとした経験から「クモはハングリーでないと巣を張らないことに気づいたのである」と結論している(大崎2000)。

個体Dを9月1日の午前10時に玄関先の植木に放した。

行方不明だった個体Aが9月2日朝、網を張ったのに気づいた。閉じ込めておいた小室の外の廊下の壁面にそって大きな垂直円網(直径約80cm)を張っていた。昨日はなかったから、9月1日の夜に造網したものである。縦糸23本、左斜め下方向の横糸42本(こしきから10cmの横糸幅5mm, 30cmの横糸幅10mm)。午前7時30分、左斜め下にのびるワク糸に安全ピンを掛けていくと(図1)、16本までは吊り下げられたが、17本で切れた。16本の重さは10.09g、17本の重さは10.70gだった。この場合、1本のワク糸が切れる破断強度はほぼ5g重から5.35g重の間にあることになる。破断強度を5.20g重とするとクモの体重が1.16g(捕獲時)だから、破断強度はその約4.5倍である。ワク糸を切っても

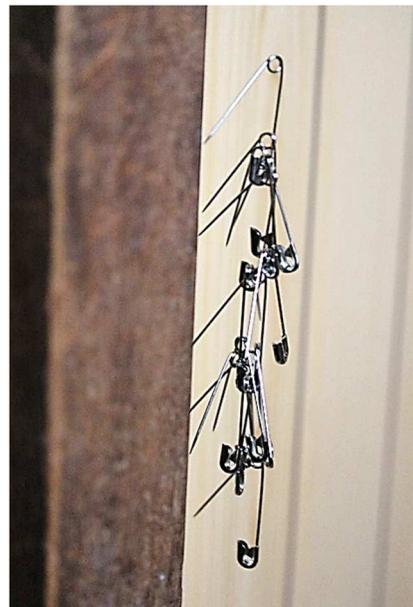


図1. オニグモのワク糸に安全ピンを14本かけたところ

網の形態は保っていたが午前9時20分には網をたたんでしまっていた。昼には梁に静止していたが、夜には2

m移動して窓ガラス状に静止していた。9月2日の夜は網を張らなかった。9月3日には再度行方不明になった。クモがいた窓の枠に残されていたしおり糸の強度を安全ピンで測定したところ、太さによって異なり、9本(5.63g)保持・10本(6.27g)で切れた糸もあれば、6本(3.74g)保持・7本(4.40g)で切れた糸もあった。深夜に同じ位置に再登場、9月4日にかけて結局造網しなかったため午前3時に玄関先に放逐した。その際に引き残したしおり糸はピンを11本(7.24g)まで保持し、12本(7.87g)で切れた。この時点でのクモ個体Aの体重は1.14g、造網によって0.02g=20mg程度体重が減ったことになる。

### ジョロウグモの糸の強度

安全ピン方式で家の庭のジョロウグモの糸の強度を測定してみた。9月3日の朝、玄関前に造網したジョロウグモ(体重0.11g)の見えないしおり糸ではピン2本(1.40g)保持・3本(1.99g)で切れ、草間のジョロウグモ(体重0.06g)のワク糸では16本(10.25g)保持・17本(10.90g)で切れた。なお、安全ピンの重さにはややバラつきがある。

破断強度は破断前重と破断後重の中間にあると仮定し、さらに2本の糸で重りを支えていることから糸1本当たりの破断強度はその半分と仮定して各糸の破断強度を見積もると表のような結果が得られた。各糸の太さを測定できていないので、これ以上の考察は無益であろう。

クモ種	糸種	破断前重	破断後重	破断強度(g重)	体重	体重当り強度比
オニグモ	ワク糸	10.09	10.70	5.20	1.16	4.5
オニグモ	しおり糸	7.24	7.87	3.78	1.14	3.3
オニグモ	しおり糸	5.63	6.27	2.98	1.16	2.6
オニグモ	しおり糸	3.74	4.40	2.04	1.16	1.8
ジョロウグモ	しおり糸	1.40	1.99	0.85	0.11	7.7
ジョロウグモ	ワク糸	10.25	10.90	5.29	0.06	88.1

### 引用文献

- 池田博明 2015. 『クモは虫を食べる』の構想. *Kishidaia*, 106:4-20.
- 遠藤知二 2012. クモと糸. IN 齋藤裕・佐原健 糸の博物誌. 海游舎. 1-40.
- 大崎茂芳 2000. クモの糸のミステリー. 中公新書.
- 大崎茂芳 2008. クモの糸の秘密. 岩波ジュニア新書.
- 中島晴子 1991. オオヒメグモに吊るされたヤモリ. *Kishidaia*, 62 : 20.
- Townley, M. A. & Tillinghast, E. K. 2013. Aggregate Silk Gland Secretions of Araneoid Spiders. IN Nentwig (ed.) *Spider Ecophysiology*. Springer. 283-302.

## オニグモと風うさぎ（3）

加藤 康子

湖から流れ出る川は、涼しい風の通り抜ける道になっている。岸には柳の木や桑の木が点在し、草の繁みは曲がりくねった野ばらの枝にぐるりと取り囲まれていた。いたるところにクモが網をかけ、月の夜に咲く糸の花は、密かな計りごとの花片を広げ野原を飾っている。

見上げるといつの間にか、月は空の高みに昇り、その光は惜しめないやさしきで誰かの道しるべとなり、眠るものたちを、分け隔てなく見守っているようだった。

月とは不思議な存在である。すべてのものの持っている色彩を、ひとつの薄いベールの層で包みこむような魔法をかける。

多種多様であるはずのものたちがひとつつながりに結ばれて、気がつけば自分もその中にいるという感覚、そんな戸惑いへ、ふっと、みちびかれることはないだろうか。

オニグモは、草の下に潜む虫達のことを想像してみた。彼らの出すさまざまな声や、風を押しつけて飛び立つときの、かすかな羽音に耳を澄ます。それらは、なんと身近に感じられることだろう。クモの持つ能力なら、そんなことは容易にできる、と言うかも知れないけれど、彼女はこれまで、あまり考えていなかったことに、あらためて気がついたのだ。

それは、青白い光に染まる月の夜の、心惹かれる風景のせいというわけではなく、少なくとも、ユリの木での平穏なクモの日常にいただけだったら、それに、想像力の権化のような風うさぎに出会わなかったら、そんなふうには思いを巡らすことはなかったかも知れない。

“この世の生きものは、みんなどこかで、反応しあい、求めあって、与え受け取り、あるいは奪い、ずっと巡り廻ってつながっている”と いうことだった。

流れに沿って進む風船は高く低く、空間をぬって飛ぶ鳥のように自由な線を描いていく風うさぎの足は すっかり力も抜けて軽く、無心に動き いつしか風船とひとつになっていた。暗い水面を透かして魚の影が すうっと現れては消えてゆく。

オニグモの小さな体は、水と風と草々の匂いにつつまれ、風船の動きにつれ、伸びやかな愉しきで充たされていった。

☆

流れの先に 橋が見えてきた。そのたもとで男の子が二人花火をして遊んでいる。兄と弟だろうか。互いの額をくっつけて、二人で花火の先に火を点けると、空に向かって勢いよくグルングルンと腕を回した。花火が輪になって散り、笑い合う二人の顔を照らし出した。オニグモはそん

な男の子達の姿に、ふと懐かしさを覚えた。まだ幼かった日々のことを思い出したのだ。クモの一生は短い。それは、季節を少し、さかのぼるほどの記憶である。

寒い冬を守られて過ごした卵のうを出て、子グモ達だけで身を寄せ合っの暮らしから、おそろるおそろる糸を伝わって旅に出たときのことや、辿りついた住み処で、初めて出会った人たちの姿を思い出す。

橋のもとにいる男の子達は どこか その人たちに似ているような気がした。その記憶の糸は、手繰ると、胸の中にほの甘く、わずかに感傷のかけらも交じる思い出として再生され、じんわりと広がっていく。

☆

オニグモの初めての住み処となった家は、ユリの木の下にあった。彼女は夕方になるとその家の軒先から糸を流し、そばの木の枝に枠糸をかけて網を張った。部屋の灯りに誘われて虫達が集まってくるので、絶好の場所といえるだろう。まだ幼く経験の浅い彼女にとっては、幸運なことに、そこにいれば食べ物に不自由することはなかった。

朝、日差しが照る頃には、一晩中をそこで過ごした網を するするとたたみ 口の中へ素早くもどすと、軒下につながる糸をのぼる。軒の隙間はオニグモの休息の場所。ゆっくりと、夕暮れまでをそこで過ごせばいい。

快適なクモ生活の始まりである。

家の中には 二人の男の子と母親が暮らしていた。オニグモは網の中央に留まって、こっそりと家の人達を観察していた。子供達のうち、兄の方は色白で頬が赤らみ 無口で大人しい性格だった。弟は浅黒い肌をしていたが、顔立ちは兄と瓜二つに似通っている。おしゃべりで絶えず動き回り、跳びはねたり寝転がったり、ことあるごとに兄にじゃれついてゆく。そして、時にはモンスターのように襲いかかったりするので、最後にはつかみ合いの大喧嘩になることもあった。

☆

夕暮れどき、オニグモはいつものように網作りにとりかかった。枠の中に間隔を置いて、ていねいに縦糸をわたすと、次には横糸を張る。内側から足場になる糸をまわし、外から粘る糸を 細かく回りながら張っていく。

オニグモはこの作業を楽しんでいた。ぐるぐると空と地上の景色が 回り舞台のように移り変わるのを見ていると、頭の中がゆらゆらと揺れ始める。緩やかな回転遊びをやっているようなものだ。続けていると、なんとなく体が軽くなり 動きも次第にリズムカルになって 思わず糸の上でステップを踏んでしまう。

ひとしきり遊びを楽しんだら、あとは呼吸を整えて網作りの仕上げに取りかかろう。と、その時だった。視野の中に 黒い影がすうっと入り込んできた。じっと眼を凝らすと、それは影ではなく、艶々と新鮮な光を帯びる黒い球体で、そこには空や雲や、まわりの景色まで移りこんでいる。

オニグモは ゆっくりと後ずさりをした。もう一度見なおすと全体がはっきりしてきた。男の子が網に顔を近づけてオニグモを見ている。黒い球体はその子の黒眼だったのだ。二人のうちの兄の方で、今、初めてオニグモに気付いたのだろうか、見開いた眼は、驚きと、抗えない好奇心に満ちて輝いていた。

オニグモの知る仲間の虫達の誰よりも、はるかに巨大なその黒眼は 半月形の瞼のふちどりの中を オニグモの動きを追って、上下左右斜めと、あらゆる方向に移動できた。

そんな眼に 近くでみつめられていると、うっかり吸い寄せられてしまいそうで、オニグモはどぎまぎと落ちつきを失い、足がこわばって動かせなくなってしまった。すると、男の子はそっと窓から遠退いて、離れたところから 静かに視線をおくってきた。

☆

あくる日からオニグモが網を作り出すと いつも ガラス窓のむこうに まじまじと見つめる二つの眼があった。その眼は、生き生きとオニグモの姿を追いかけるかと思うと、じっと動かずにいて、深い色あいを宿すようなときもあった。人の眼は その感受性によってさまざまに変化し、言葉以上に素直に気持ちを表している。オニグモは男の子の眼に、彼のやさしさが見えると思った。

オニグモが横糸を張り始めると、その眼は、いっしょになってぐるぐると回り、瞼のふちどりにある黒い睫が、行儀よく並んで動いていくようすとてもかわいらしい。

彼女はその瞬間がたまらなく好きだった。何と言えればいいのか、“心の中を、眩しい風が、さっと、駆け抜けてゆく” という感じがするのだった。

☆

夏の訪れとともに自然はより深い呼吸をはじめようだ。木々の緑は濃く、澄みわたる空、立ち上る積雲 昆虫や小鳥達は飛び交い 花は濃厚な香りをまとう。

朝、オニグモは野原を通りぬけてきた風に吹かれていた。網のまん中でゆっくりと足を伸ばす。節々を柔らかくしなやかにすることは、歩脚としての一步一步の確かさにつながる。誰かと正面から向き合うときに、体のまわりに関節を折り曲げてつくる八本の足の形は 単に足というよりも、相手に緊張を与え、優勢を誇示するものではないだろうか。

それに なによりもクモらしい姿形で、美しくもありたい。それは 彼女のオニグモとしての

プライドだった。

晴れた空に いそいそと小鳥達が飛び立っていった。やがて軒先にも日差しが届くだろう。オニグモは少しのあいだ、風の流れるにまかせて、ただ無心に揺れていたと思っていた。朝露でしっとりとした網の雰囲気は特別なものだ。作りたてのピンと糸の整った網には クモの秩序があつて、小さいなりに空間を支配する力を持っているが、一晚経って 破れたところもあるような、少したわんでふっくらとした網は 安定感が感じられて心地よかった。

☆

なにげなく覗いた家の中に、目覚めたばかりの男の子と弟がいた。二人は まだ柔らかな眠りの名残を楽しむかのように、生々しい子供面と、産毛の生えた日焼けした手足とを投げ出して、椅子に寄りかかっている。

汗と日なたのにおいを発散させる子供達の表情は、無邪気そのものだが、何故か、あわれとも言い表したいような不思議な引力も持っている。大人達はそれを見て、ただ無条件に、憐れみ、守り、育みたいという思いでいっぱいになる。できることなら今あるままに、そのままに、変わる事のない存在であってほしいと願うけれども、それはとても難しい。子ども達の時間は めまぐるしく動いてゆくものだから。

☆

やがて 弟の方がムックリと起き上がり、ひとつ欠伸をすると、となりにいる男の子に向かって、いつものように押したりくすぐったりを始めた。何度、手で払い除けられてもやめようとはしない。拒まれるとますます夢中になって、クックッと喉を鳴らし 笑いながら身を乗り出してくる。

とうとう二人の間で小突き合いが始まった。もう、こうなると止まらない。男の子のほうが体が大きいだけ力も強い。弟は歯をくいしばり、小さな拳骨を振り回して突進していく。

そのうち 弾みのついた一撃が 思いがけず男の子の眼にぶつかってしまった。

「あっ イタッ イタイヨー」

彼は手で目を被いうずくまった。弟は一瞬たじろぎ 身を硬くして立っていたが、その場で、くるりと後向きになると 自分もうつ伏せになってしまった。そして薄目を開けて指の間から盗み見ている。

男の子は起き上がり ごしごしと眼をこすりまわした。弟が知らぬ振りであつ伏せたままなのを見ると、口を尖らせて地団太を踏んだ。もともとのきっかけは弟だったはず。

「なんだよ、あやまれよ。」

つかつかと近寄っていき、腿を拳骨でパシッと叩いた。それでも弟は何の反応もしない。する

と、今度はあらん限りの力をこめて 足をつねりあげた。

その途端、母親が部屋に入ってきた。彼女は男の子の前に仁王立ちになった。

「だって！ 眼をぶったんだもん！」

男の子は頬を打たれて 椅子の上に倒れこんだ。

いったい、母親が見たのは、弟の足を思い切りつねる男の子の姿だけだったのだろうか。彼女は何も言わず 足音をたてて部屋を出て行ってしまった。弟も泣き声をあげ、後を追った。

静かになった部屋に朝陽が射し 庭の草花のみずみずしい香りが漂ってくる。



男の子は立ち上がり、窓に近づき外を眺めた。朝陽がガラス窓を抜けてその顔に注ぐ。彼は眩しそうに二、三度まばたきをした。強くこすったせいだろうか、眼は少し赤らんでいる。

オニグモは彼を見ていた。そして、心の中でつぶやいた。

『こんな兄弟喧嘩なんて しょっちゅうあることよ、男の子なんだから 今日には運悪く母さんに叱られてしまったけれど・・・』

男の子もオニグモを見た。

すると、突然何を思ったのだろうか、彼はがらりと窓を開け窓枠に乗ると、オニグモに向かって手を伸ばした。指を広げて 斜めに切るように振り下ろす。網は引っ張られて彼の指先にくっつき 伸び切って壊れてしまった。

「おっ ととととと」

オニグモは軒先につながる糸にとりつくくと、大慌てで軒の隙間に逃げこんだ。

一瞬の出来事だった。気がつくとも男の子の姿は無く、くしゃくしゃによれて固まりになった網が軒先からぶら下がっているばかりだった。

「な・ん・て・こ・と」

オニグモは頭がクラクラした。いつも見つけていた男の子の明るい眼差しを、もう一度思い浮かべてみる。

怒りは 全く感じなかった。

その日、夕方になると風が吹いた。オニグモが糸を流すと 糸はユリの木の大きな葉をつかまえた。彼女はそのまま葉の上に移り、ユリの木の枝を、上へ上へと登っていった。その日からずっと、ユリの木が彼女の住み処になった。

☆

「きれいな花火だったね」

風うさぎが言った。オニグモは 遠退かる花火と子供達を眺めた。花火はくるくると回転しながら川面に落ちていった。

入退会は：事務局 初芝伸吾 〒186-0002 東京都国立市東 3-10-8  
コンフィデンス高垣 105 有限会社エコシス  
E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp